原始の公害

木野　工

北千島の北端、占守島というところに満一年いたことがある。もちろん、戦争による駐屯で、私は海軍の歩兵、陸戦隊の高射砲（海軍では高角砲といっていた）の部隊をもっていた。しかし、離れ小島で、何かと器械類を扱うことの多い海軍部隊なので、通信機器、電探（レーダー）、水中聴音機から、道路や橋を造る土木機械まで操作した。

昭和十九年四月に、この千島の北端に着任した日は見事な晴天で、海上に碇を下していた輸送船から望見すると、狭い海峡がどうしても発見できないほど、真白い陸地が地平線いっぱいに連なっていた。幌筵島（ほろむしろ）と占守島が雪と氷でつながっていて、それが海上からは大陸のように見えた。

船は雪に蔽われた海峡へ静かに要心深く進入して行ったが、それは島と島の間の海峡を航海しているという感じではなく、雪原を橇で行くような感じだった。

どこを見ても人影どころか、物の影もない。樹さえも見えなかった。

海峡に入っているのだと知らされたのは、占守湾の入口近くになってからで、肉眼には小さな点としか見えない黒いものがぽつんと雪原に一つだけあった。

「ほう、キツネだ」

通いなれていた船長がそう言って望遠鏡をかしてくれた。七倍半の、東郷元帥が首から下げている例の双眼鏡だった。それで確認すると、これはキツネではなくて陸軍の兵隊さんだった。

占守島と幌筵島は氷結した海面で冬は一つの島に結ばれるのに、どういうわけか占守島にキツネはいなかった。

幌筵島はかなり大きな島で、相当の山もあり、日本海側には欝蒼と茂る原生林が拡がっていて、当時はまだ伐採事業が本格的ではなかったが、それでも相当のものを伐り出してはいた。樺太の石炭と同じように、封鎖林として保存されていたのかも知れない。

この原生林にネズミが猛烈に発生した年がある。殖えた、という感じではなくて、ある年に唐突に天から降ったか地から湧いたか、と言った感じでふえたのだそうだ。それが、北隣の占守島へは渡らず、南の島から島へ移って行った。対策に困った農林省と帝室林野局が天敵としてキツネとイタチを放った。

ところが、これが豊富な食糧（つまり野ネズミ）のせいか、自然条件に合ったのか、ネズミを圧倒する勢いで繁殖し、ネズミばかりではなく、小鳥や貴重な渡り鳥のタマゴなどを襲うようになって、キツネとイタチ狩りを計画しなければならないほどになっていた。私の行った昭和十九年はそんな年だったので、黒い影は銀狐（ぎんこ）と間違われ、占守に銀狐が現われたのかと、物なれた船長をも驚かせたのだった。

しかし、夏などは海峡ごしにキツネの親子連れが悠々と山腹から海岸沿いの草原におり

て来て、何となく餌を漁っているのが見えるのに、占守島では遂にキツネもイタチも見なかった。不思議だった。

それとは逆に、占守島で私の見たシロフクロウ、ワタリガラスなどはこの島だけで、幌莚にはいないらしいと聞かされた。

シロフクロウは司令部に迷いこんで来たのを遇然に捕えたもので、始末に困ったが飼ってみた。餌付けが難かしく、何をやっても食べないので餓死するのではないのかと思っていたら、或る朝、不思議なものがこの鳥の足許にころがっているのを発見した。ちようどお店で売っているダンゴほどの大きさの完全球で、灰黒色の塊りである。糞にしては大きすぎる。猛禽なのでうっかり近寄れず、苦心してそっとその怪球を手にしてみると、さらさらと崩れてしまった。球は毛の塊りだった。ぞっとした。いろいろとみんなで話合って、これは結局ネズミだろうということになり、生きたネズミを隣の幌莚島から獲って来て与えると、餌付けはあっけないほど簡単に成功した。この頃はまだ占守でネズミを捕えるのは困難なほど少なかった。見たことがなかった。ところが、半年もすると、占守もまたネズミ天国になった。食糧庫に大きなザルを二つ重ねて置き、上の方を少しずらし、下のザルに米を少々入れておくと、ものの五分とたたぬうちに、下のザルがネズミで溢れる。上のザルをすっと引いて蓋をすると一度に七八十匹とれた。シロフクロウは一日に三匹ほどしか食べない。

このネズミが隣の島からやって来たのではなく、種類の異るものだと知らされたのは、戦後になってからだった。

変なカラスがいた。ニワトリよりも少し大きい。そしてオロロン鳥のように低音で古い時代のピアノ、ハープシコードの低音部をぽつんぽつんと叩いたようないい声で鳴く。のどのところにノドボトケの大きいような丸いふくらみがあって、鳴く時にはこれが動く。このカラスは夕暮れどきの薄くらがりの兵舎へよく飛んで来た。

北方動物、特に鳥類の権威である斉藤春雄先生にたずねてみたら、非常に面白がって、詳しく生態をたずねられたが、そんなに珍らしいものとは知らなかったので、メモさえとっていなかった。

シロフクロウもナキガラス（私どもの俗称で斉藤先生はワタリガラスの一種だろうと言っておられた）も、われわれ兵隊が大挙して上陸した翌年には、殆んど姿を見せなくなっていた。

鮭などは極端だった。川幅三米ほどのところに盛りあがるように遡って来た。最初の年、私は馬糧を扱うフォークを持って川に入ったところ、魚市場のサケ倉庫に足を踏み入れたようなもので、鮭が足にぶつかり、噛みつかれ、よろけて倒れたら鮭に食い殺されそうだった。その川に翌年は全く鮭の姿を見なくなった。

上陸した年の夏は道路にも飛行場にも草っ原にも岩の上にも、やたらにカモメの卵が産み捨てられていた。十分も歩くと肩にかけた袋が一杯になった。タマゴ焼は石油に一杯になったタマゴを下から火を焚いて作った。翌年春、期待したタマゴは垂直に近い崖にだけしか見られなくなった。

人間が三千人ほど棲みつくと、島の自然はこれほどガラリ一変する。これが自然破壊、公害というものなのだと今にして思いあたる。